

氏 名 荻野 夏木

学位(専攻分野) 博士(文学)

学位記番号 総研大甲第 1536 号

学位授与の日付 平成24年9月28日

学位授与の要件 文化科学研究科 日本歴史研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 病気をめぐる心性と行動ー疱瘡・麻疹・コレラを中心にー

論文審査委員 主 査 教授 大久保 純一
教授 常光 徹
教授 松尾 恒一
教授 鶴見 太郎 早稲田大学
名誉教授 酒井 シヅ 順天堂大学

論文内容の要旨

本論は、病気という現象を通じて、それをもたらすとされる目に見えない存在に対して人々が抱く不安や恐怖といった感情と、それが行動や習俗にどのように表現されているかについて研究したものである。具体的な分析の対象として疱瘡、麻疹、コレラという三つの疫病をとりあげ、それぞれの病気観、予防や治療に関するまじないの習俗、流行時の世相などについて考察した。この三つの病は原因として疫病神の存在が想定され、それらへ対処することで罹患予防と回復が図られたため、人々の想像力の表われ方を最もよく見ることができるからである。序章では、こうした問題意識に基づいて先行研究を整理し、研究の視角について述べた。個々の病気の習俗に関する研究には蓄積があるが、病気ごとの比較を通してそれぞれの特徴や差異について検討したものは少ない。本論ではこの点を念頭において考察を進めた。

第一章では、近世において疫病神が言説や絵画の中でどのように表象されているかを考察した上で、それぞれの疫病のイメージを明らかにした。疱瘡や麻疹の疫病神は、絵画や説話・風説の中で人の姿で表象されることが多いのに対し、コレラ流行の場合は「コレラ獣」や狐狸を原因とする風説が多く見られた。ただし、人の姿で表わされる疱瘡と麻疹の疫病神にも、その描かれ方には差異がある。錦絵や風説において、麻疹の疫病神のほとんどはみすばらしく汚いなど、負のイメージを帯びている。他方では、疱瘡神も源為朝のような豪傑に退治される様子が少なからず見られるが、疱瘡を軽くする呪具を携えた姿で描かれることもあるなど、必ずしも負の側面のみが表象されているわけではなかった。つまり、疱瘡神は場面やモチーフによって、病気からの守護（予防、回復）という恩恵をもたらす福神と、疫病流行や重篤化による死をもたらす悪神のイメージが使い分けられている。このことは、疱瘡神が疫病を司る疫病神だからこそ罹患後の症状を重くも軽くもできるという両面性を物語っている。

第二章では、第一章での結論を踏まえた上で、疫病除けの習俗とその背後にある疫病に対する心性について検討した。病気の予防のために、門口や軒先に呪符を貼るなどのまじないは各地で見られる。疱瘡ではとくに源為朝ら疱瘡を撃退するとされる豪傑の名前を書いた呪符が広範に使われ、疱瘡神が来訪しないことを約束した証文も存在した。これらの習俗は疫病神が家へ侵入するのを防ぐことを目的としているが、その一方で、疱瘡神をもてなす習俗も行なわれていた。疱瘡は避けがたい脅威だったために、人々ははじめから罹患を逃れようとするだけでなく、軽度の罹患や速やかな回復などの恩恵を得るために、疱瘡神を喜ばせて福神的な面を引き出すための習俗をも行なってきた。これに対し、麻疹やコレラに関する習俗は罹患を避け、即座に追い払おうとするものがほとんどであった。麻疹は流行周期が長いために免疫が出来にくく、一度流行すれば幅広い年齢層が罹患した。また、コレラは近世末に日本へ流入した疫病で、当時は有効な対処法が存在しなかった。このように、麻疹・コレラは疱瘡に比べて一度の流行で発生する患者数が多い上に、致死率も高く、その流行はより甚大な被害をもたらした。そのため、疱瘡のように疫病神を歓待してから送り出すような習俗は、ほとんど生まれなかったと考えられる。

このように、疫病除けの習俗の根底には「疫病神を遠ざけることで疫病から逃れようとする」という共通する観念が見られるが、それぞれの疫病観や習俗には差異が見られた。そうした差異には、個々の病気に対する経験や知識の差、流行時の被害や世相の違いが少なからず反映されていた。疫病神観念やまじないなどの習俗は想像力から生まれたものであるが、人々の長年の経験や知識、それぞれの疫病に向ける心性に根ざしてい

た。

なお、疱瘡と麻疹については、近世期に行なわれていた習俗より、むしろ近現代に行なわれていた習俗に、類似点が多く見出せる。このことは、近代における医療の発達により、疫病の経験から遠ざかっていくにしたがって、疱瘡と麻疹の習俗が混同されていた可能性が考えられる。

第三章では、史資料に即して、近世期における疫病除けの習俗の担い手や実態、疫病流行時の世相を明らかにした。近世末期から明治初期にかけて記された『指田日記』からは、江戸近郊の集落で、疫病除けの習俗に陰陽師や修験者らの宗教者が深く関わっていた実態が読みとれる。彼らは疱瘡棚や酒湯などの疱瘡習俗に広く関与し、疫病が発生した際の疫病神送りでも中心的な役割を果たしていた一方、近世末のコレラ流行時に流布した狐狸や獣を病因とする言説を冷静に批判する面もあった。また、近世末期の疫病流行時には、疫病が発生・拡大した原因と当時の国内外の社会の動きを結びつけた風説がしばしば見受けられるなど、そのときどきの社会情勢も、人々の疫病に対する想像力に影響をおよぼしていた。

第四章では、明治になって病気除けの習俗に対する規制や批判がどのような方針・手法で行なわれたか、それによってどのような衝突が生まれたかを論究した。明治初年代、疫病を含めた病気除けのまじないは人々にとって身近なものだった。しかし、新たな知識や制度を取り入れる姿勢、すなわち「開化」を掲げた国や地方行政はそれらの習俗を「旧弊」として撲滅しようとし、布達や神官・僧侶らを通じて取り締まった。同時に、民間でも「開化」的な意識を広めていこうとする啓蒙的な活動が盛んに展開された。だがこれらの「旧弊」撲滅運動は初年代後半をピークとし、その後は下火になっていった。しかし、明治12年にコレラが流行した際、疫病神送り、集団祈願、疫病除けの呪符などのまじないによってコレラを退散させようとする庶民と、その動きを取り締まろうとする行政側との間にふたたび激しい衝突が起こった。疫病神送りや集団祈願は、若者が率先して行なったり、なかには地方行政の末端が加担しているケースすら見られた。このような呪術的な行為はあらためて厳しく取り締まられ、やがて表立った衝突は減少していった。こうした時代の中で、疫病除けの習俗の一部は人々の生活の中に生き続けていった。

終章では各章で考察した点を整理した上で、今後の課題と展望について述べた。本論では近世末期から近代初期における疫病流行という歴史的な事象から当時の人々の行動、心性を分析する一方、疫病除けの習俗・祭礼についても検討し、その根底にある疫病観を考察することで、疫病をめぐる人々の心性と行動を複数の視点からとらえた。近代医療が浸透するにつれ、疫病除けのまじないが実際の疫病流行に際して行なわれることは少なくなった。しかし、現代の祭礼や行事のなかにも疫病除けの習俗につらなるような、病気をもたらす存在を生活圏の外へ追い出そうとする観念を見ることができる。それは、病気に対する不安や恐れが今なお私たちの心に深く根ざしていることを物語っている。今後は疫病以外の病気へも対象を広げ、人々の病気に対する関わり方をさらに検討していきたい。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、江戸後期から明治初期にかけて流行した疱瘡・麻疹・コレラを対象にして、人びとが疫病に対して抱いてきた想像力と、疫病の流行に伴うさまざまな感情が行動や習俗にどのように表れているかについて考察したものである。近世後期以後の随筆や日記類、浮世絵などの絵画、近代の行政文書、新聞、民俗資料など幅広い資料を用いて、多面的な視座から論じている。

本論は四章からなり、その前後に序章と終章が配されている。序章では、多くの人びとに深刻に受け止められてきた三つの疫病を相互に比較し研究を推進することの意義について明確に提示するとともに、多分野にまたがる先行研究を十分に咀嚼し、その整理を的確に行っている。

第一章「説話と絵画に見る疫病神—近世以降における表象—」では、疱瘡、麻疹、コレラといった疫病が近世の言説や浮世絵を中心とした絵画の中でどのように表象されているかを、幅広い資料を通して具体的に提示し検討している。疱瘡と麻疹の場合は病を司る疫病神の存在が想像され、説話や錦絵などの絵画においては人の姿で表象されることが多いが、コレラの場合は「コレラ獣」の姿で描かれるなど疫病神の描かれ方に違いがみられる。さらに、疱瘡と麻疹のあいだにも差異があり、負のイメージが強調される麻疹に対して、疱瘡には予防や回復など恩恵をもたらす福神と疫病流行をもたらす悪神という二つのイメージが使い分けられている点を明らかにしている。また、麻疹流行に際して描かれた錦絵が安政大地震の「鯨絵」の図像を継承したのがあることを明らかにするなど、絵画史の手法も駆使しながら示唆に富む指摘がなされている。

第二章「疫病除けの習俗」では、疫病除けの習俗とその背後にある心性について、まじないや浮世絵などの絵画を通して幅広く検討しており、それぞれの疫病に対する理解により習俗や心性には違いがあることが明らかにされている。子どもの身近な病気として通過儀礼的な意味を帯びた疱瘡では、来訪した疱瘡神をもてなす習俗がみられ、その穏便な退散を願うのに対して、麻疹やコレラでは疫病神を即座に追い払おうとする例が多数を占める。麻疹は流行の周期が長いため免疫ができにくく、一度流行すると幅広い年齢層が罹患した。疱瘡に比べて麻疹とコレラの流行は甚大な被害をもたらす恐怖感も一段と強かったことが、疱瘡のように疫病神をもてなす習俗を生まなかった背景にあると指摘する。疫病観や習俗に差異がみられる背後には、個々の病気に対する経験や知識の差、流行時の被害や世相の違いが少なからず反映されている点を明らかにしている。

第三章「近世における疫病流行の実態と世相」では、幕末期、江戸近郊での疱瘡、麻疹、コレラの流行と陰陽師として活動した指田藤詮の事例を『指田日記』をもとに分析し、その活動の実態を描き出している。疱瘡が発生した際には、陰陽師が疱瘡棚の設置や疫病神送りに関与するなど中心的な役割を担っている点を具体的に検討している。疱瘡に対する宗教者の関与については民俗学の分野でも不明な点が多いだけに、日記の詳細な分析を通してその実態の一面を明らかにしたことは高く評価される。また、藤詮の子が西洋医学を修め種痘導入など地域医療の中心として活動していたという一見対照的なあり方についても、藤詮の医療に対する理解や心性を日記の中に丹念にたどることで説明している。

第四章「病気をめぐる民俗と近代」では、近代における県史等の地方史や新聞記事を広くあたることにより、明治初年頃における近代化の過程で「開化」と「旧習」との衝突の事例を数多く拾い上げている。明治も後半になると、近代化の浸透により祈祷やまじないといった「旧習」が表だっては現れてこなくなったものの、民衆の生活の基層の部分では継承され続けたことを明らかにした。行政の側でも「旧習」を頭から否定せず、実害のな

い限りではそれを容認するという事例も紹介し、「旧習」から「開化」という一方向的な変化、あるいは「旧習」と「開化」の対立と後者による前者の克服といった単純な歴史ではなかったことを示している点でたいへん意義深い。開化時に新しい価値観・制度が積極的に導入されていく過程で、庶民層と行政側との間に激しい相克が生じ、その中で病気除けのまじないなどに批判の矛先が向けられていくありさまと、それに反発する人々との衝突を克明に描き出すことに成功している。また、近代的な医療の発達とともに疫病除けの習俗や俗信はより確実な治療手段へと役目を譲っていくが、その一方で一部は変容しつつ受け継がれていった実態も指摘している。

終章では、本論文で考察し明らかにしてきた点をまとめるとともに、疫病神を病の原因とする世界観や価値観について、さらに総合的に検討すべきことや、明治以後の近代化の過程における人々の想像力と近代的価値観の関係についても考察をすすめることなど、今後の課題と展望についても具体的に提示し、将来における研究の発展を期待させるものとなっている。

以上のように、本論文は、近世末期から近代初期に発生した疱瘡・麻疹・コレラの流行を対象にして、人びとの行動や心性を多彩な資料を用いて多角的に分析した労作であり、疫病除けの習俗・祭礼といった視座からの考察を加えて、その背後に存在する疫病観の一端について明らかにした点においても高く評価される。

ただし、いくつかの課題も指摘される。

そのひとつは、習俗のもつ意味や機能は常に固定されたものではなく、明治以後の近代医学の流入と普及など、医療技術の発達に伴い変化する場合が当然予想されるはずだが、この点に関する目配りが必ずしも十分になされているとは言えない点である。

また、幕末のコレラ流行期におけるアメリカ狐の噂など、いわゆる流言飛語の発生を地域という小さなコミュニティにおける現象としてとらえるのではなく、近代における都市災害の中に位置づけ理解する視点が必要ではなかったかと考えられる。このほか、資料として引用した日記に時代的な間隔があることについて、資料的な吟味を今少し加える必要があったことも指摘される。

以上のように、いくつかの問題点と課題が残されてはいるが、本論文は関連資料を博捜し、着実な分析にもとづいて上に述べたような新たな知見を獲得しており、高く評価できる。以上によって、本論文が博士学位論文にふさわしいものであると結論づけ、全員一致で博士の学位を授与するに値すると判断した。